

日本語学習者の助数詞の習得に関する調査

濱野 寛子・佐野 香織

1. はじめに

本研究は、日本語学習者を対象に日本語の助数詞「本」について習得の実態を調査することを目的としている。

助数詞は、虫を数えるなら通常は「匹」、人間なら「人」、電話なら「台」を用いるというように、数える事物の何らかの意味的特徴を反映する言語表現である。本研究で注目する「本」は、助数詞の中でも非常に多様な事物を数えることができるため、複雑な意味を持つ助数詞として様々な記述的分析が行われてきた。

本研究では、助数詞「本」について日本語学習者の習得の実態を調査するにあたり、質問紙を用いて、「本」の使用が可能である語に対する数え方を日本語学習者に尋ねた。そして、同様の課題を日本語母語話者にも行い、両者の結果を比較した。

なお、日本語教育の現状として、助数詞は初級の段階で導入されるだけで十分な指導が行われないため、日本語学習者が各自で適切に助数詞を習得していく上でも、本研究の調査で習得の実態を知ることが、十分意義があるだろう。

2. 先行研究

2.1 助数詞「本」の概観

助数詞「本」は、基本的に「細長い」形状の特徴を持つ無生物を数えるとされる (cf. Lakoff 1987, Matsumoto 1993, 飯田 2004, 西光 2004)。しかし、実際「本」で数えられる語は、(1)に示すように、物理的に形状を持ったいわゆる具体物だけでなく、形状をもたない抽象的な事物を表す語も含まれるため、「本」は多義的な性質を持つといえる。

(1) 助数詞「本」で数えられる語 (cf. 飯田 2004)

鉛筆、紐、指、木、川、道、タワー、タイヤ、ネ

ックレス、輪ゴム、ストロー、トンネル、注射器、電車、バス、ゲームソフト、カット集、記事、原稿、話題、論文、報告、演劇、映画、番組、CM、連載、コンサート、電話、葉書、手紙、ホームラン、ヒット、シュート、ジャンプ、家具、契約、くじの当たり

(1)の中で、例えば「バス」を数えるとき、「バス」を、車体という物理的なものを表すと捉えるなら「台」で、運行といった抽象的な意味的特徴から捉えるなら「本」で数える (cf. 飯田 2004)。また、「原稿」や「演劇」に対して「本」を用いるのは、ある種の業界に属する人どうしの数え方であるといえよう。従って、「本」の理解の度合を判断する際に、従来指摘された事例全てに対する「本」の理解をもつことは要求されないと考える。ただし、日常生活に見られる範囲で、数える話者や数える状況に依存的な助数詞の振る舞いについて理解することは重要だろう。しかしながら、本研究ではこうした点に踏み込む前に、単に、語を提示することで日本語学習者の回答が、日本語母語話者の回答にどのくらい近づけるかということから、日本語学習者の習得の実態を調べることにした。

2.2 理論的分析

助数詞「本」の意味に関する理論的な研究として、認知言語学的アプローチから、包括的な「本」の意味記述が提示されている。それによると、「本」が形成する意味カテゴリーは、物理的な「細長い」形状の特徴を中心的な意味とし、そこから抽象的な意味へと意味拡張が生じていると分析される (Lakoff 1987, Matsumoto 1993, Nishimitsu 2004)。例えば Matsumoto(1993)では、「際立って一次元的なもの」であるという条件を挙げ、意味拡張の現象として、I) 巻かれているもの、輪状のものへの拡張 (例「セロハンテープ」「輪ゴム」)、II) 容器の形状の

メトニミー的拡張¹（例「注射器」「缶ジュース」）、Ⅲ）メタファー的拡張（例「台本」、「電車」、「映画」、「ホームラン」）の3種類を指摘している。

しかし、このような認知言語学の理論的枠組みによる「本」の意味の一般化では、上述した数える話者や数える状況に依存的な助数詞の使用など、捉えきれない現象がある。本研究の調査では、認知言語学の理論を用いた議論については、数え方を調査する語の選定の際に、参考とするに留めた。

3. 調査方法

3.1 概要

調査方法 質問紙による調査

「本」の使用が可能な22語の数え方について尋ねる問題を作成した。また、フォローアップインタビューを行い、参考として回答の理由を尋ねた。

調査対象者

日本語学習者（SPOT Ver.B 中級以上の英語母語話者 9名）

日本語母語話者（大学生・大学院生 20名）

手続き

日本語学習者に対しては図1中の①から④まで全て行い、日本語母語話者に対しては②と④のみ行った。

① SPOT Ver.B
② 課題1) 質問紙の回答 設問1 産出問題、設問2 理解問題
③ 日本語学習についてのアンケート記入
④ 課題2) フォローアップインタビュー

図1 調査手続き

分析方法

回答された助数詞の頻度数をそれぞれ単純集計し、日本語学習者と日本語母語話者の結果を比較する。

3.2 学習者について

学習者は、アメリカの大学・大学院で日本語を学んできた学生で、レベルは SPOT Ver.B 中級以上である。調査時に行ったアンケートによると、日本の滞在歴は1ヶ月から1年と様々で、助数詞の学習は、初級の頃に授業で習ったと回答した。その後は必要を感じた者は各自で勉強しているようである。

3.3 質問紙について

質問紙では、助数詞を用いる数え方の統語形式は、数量表現に連体詞「の」を伴う数え方（例「3本の鉛筆」）に統一した。

調査対象の語の選定では、日本語学習者が意味を理解している語であるという条件のもとに、先行研究で指摘されている使用について参考にした。手順としては、日本語初級教科書の中から「本」で数えられる名詞を、単語親密度²の値を参考にしつつ選んだ。そして、予備調査を行い、最終的に以下の22語に絞られた。これら22語にダミーとして5語³加えた27語に対して質問文を作成した。

表1 調査対象の語

	調査対象の語
具体物	傘、バナナ、髪の毛、ボールペン 体温計、ネクタイ、木、花、道、タイヤ、ネックレス、フィルム、歯、 ペットボトル、缶ジュース、瓶ビール、注射器、
抽象物	ビデオ、映画、ホームラン、（飛行機の）便、契約

本研究では、助数詞の習得の実態を産出レベルと理解レベルの両側面から調べるため、前者が自由回答による設問、後者が選択肢式の回答による設問を作成した。選択肢として用いる助数詞は、「本」の他に日本語初級段階で導入される「つ」、「個」、「枚」「人」を用いた。そして、産出問題では、最もふさわしいと思う助数詞の一つ書き、理解問題では、適当だと思う助数詞全てを選択するようにした。

(2) 設問の例

設問1 4 []の傘

設問2 3 {つ・人・本・枚・個}の傘

数詞は、「2」から「4」までをランダムに組み合わせ、作成した質問文もランダムに並べた。また、各設問で教示内容を理解しているか確認するために、初めに練習として5題作成した⁴。

4. 結果と考察

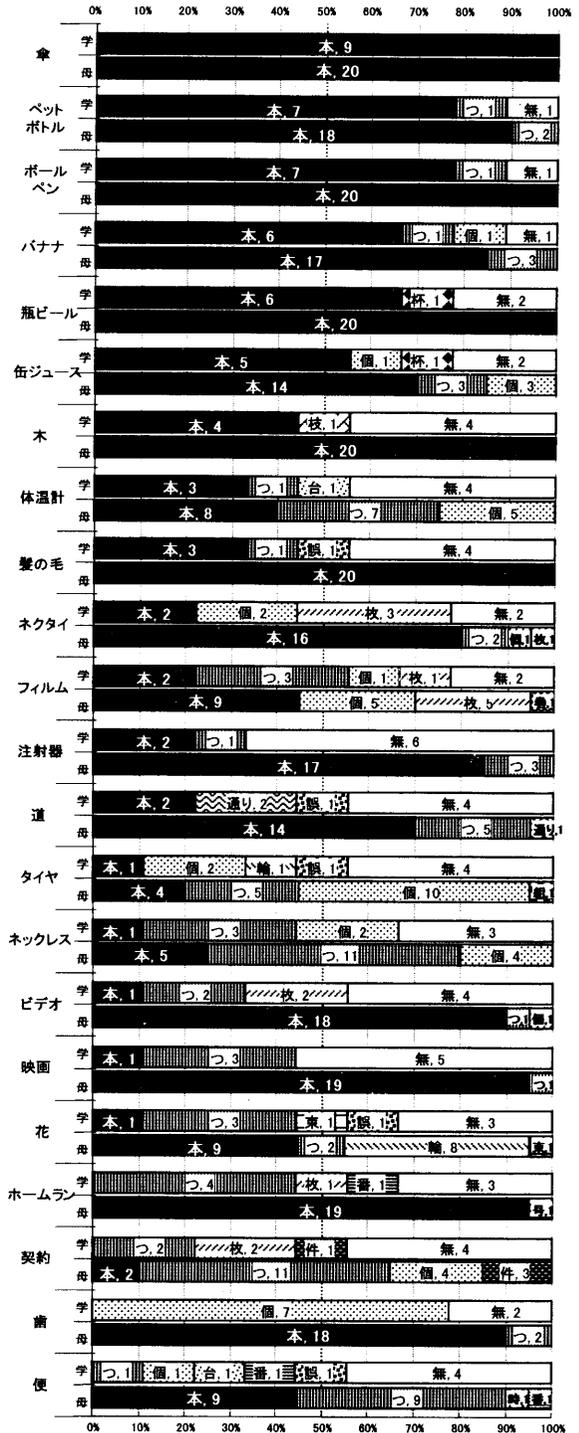
まず、自由回答式の設問1の集計結果を図2に示す。日本語母語話者の結果をみると、各語で回答頻度数の7割以上が「本」である15語(cf. (3))と、5割以下である7語(cf. (4))に二分することができる。

(3) 傘[20]、ボールペン[20]、木[20]、髪の毛[20]、瓶ビール[20]、映画[19]、ホームラン[19]、ペットボトル[18]、ビデオ[18]、歯[18]、バナナ[17]、注射器[17]、ネクタイ[16]、缶ジュース[14]、道[14]

(4)フィルム[9]、便[9]、花[9]、体温計[8]、ネックレス[5]、タイヤ[4]、契約[2]
 ([]内の数値は回答頻度数)

「本」の回答頻度が5割以下の7語について、他の助数詞の頻度数をみると、「契約」「タイヤ」「ネックレス」は、「本」より「つ」や「個」の頻度数が高い。その他4語も、他の助数詞の頻度数が「本」の頻度数と近い値であるため、この7語については、「本」が最も適切な助数詞であるとはいえないだろう。一方、日本語学習者の回答結果をみると、(3)に挙げた語の中では、「傘」、「ペットボトル」、「ボールペン」などの語で「本」の頻度数が高い。「本」の頻度数が低い語には、「ネクタイ」や「注射器」「歯」などの具体物を表す語と、「映画」や「ホームラン」、「ビデオ」といった抽象的な事物を表す語がみられる。このことから、日本語学習者は、「傘」や「ボールペン」など、「細長い」形状的特徴が恒常的なものに対して「本」を産出したといえるだろう。しかし、「ホームラン」や「映画」のような、具体的な形状を持たない抽象的な意味を持つ語に対しては「本」の産出が難しいようである。次に、選択肢式の設問2の結果を図3及び図4に示す。図4の日本語母語話者では、「ネックレス」、「契約」、「タイヤ」を除く19語で、「本」の頻度が7割以上の高い値となった。一方、図3の日本語学習者の回答結果では、多くの語で「本」の頻度数が高くなるような変化はみられない。設問1で「本」の頻度数が高い語は設問2でも同様に高い値を示し（「ペットボトル」「傘」「ボールペン」「バナナ」「缶ジュース」「髪の毛」「瓶ビール」）、設問1で「本」の頻度数が低い語は、設問2でも大きく変わることはない。また、設問2になると「本」の頻度数が上がる語も見られるが（例「木」「髪の毛」）、「つ」や「個」の頻度数が上がる語の方が多い。特に「本」の頻度数が6以下の14語は、「つ」や「個」の頻度数が「本」とほぼ同値かそれ以上に高くなる。「つ」や「個」が用いられるのは、「本」とは別の意味的特徴に注目し使用可能と判断して選択する場合と、「本」が適応しにくいために「つ」や「個」を代わりに用いる場合の2つが挙げられる。「本」の頻度数が低く「つ」や「個」の頻度数が高くなる語は、後者である可能性が高い。その中でも、抽象的な事物を表す「映画」、「便」、「ホームラン」

は、「つ」の頻度数が上がっており、理解レベルでも、抽象的な事物に対する「本」の意味について習得されていないことが読み取れる。



・グラフ内の文字は回答された助数詞とその頻度数。「誤」は誤答、「無」は無回答
 ・学：日本語学習者、母：日本語母語話者

図2 設問1集計結果の比較

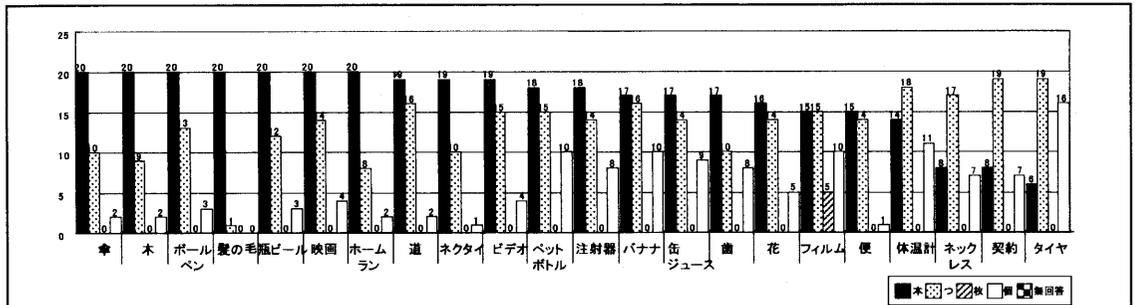


図3 設問2 回答結果（日本語学習者）

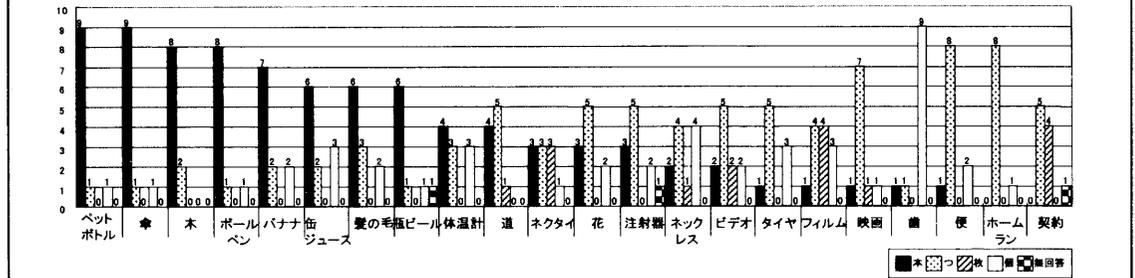


図3 設問2 回答結果（日本語母語話者）

5. おわりに

本研究では、助数詞「本」の意味について日本語学習者の習得の実態を調査した。調査結果から、SPOT Ver.B で中級以上の英語を母語とする日本語学習者では、「本」の基本的な意味の一部についてのみ習得しているという現状が示された。そして、「本」は、まだ理解語彙だといえる。

助数詞の研究は、言語習得の観点からはほとんど注目されていないため、本研究での調査を足掛かりとして、助数詞の使用を動機付ける背景的な側面や、数える状況に応じた助数詞の使用の違いといった点に関しても、調査方法を吟味しながら研究を重ねていきたい。

注

1. メトニミーは、認知言語学において、近接性に基づいた類似関係にある言語現象を指す。
2. 『NTT データベースシリーズ日本語の語彙特性』参照。
3. ダミーの5語は、「先生」、「皿」、「ハンカチ」、「オレン

ジ」、「ともだち」とした。

4. 日本語学習者の調査の際は、質問紙の配布前に選定した語のリストを見せ、意味がわからない語がないことを確認した。

参考文献

- 飯田朝子 (2004) 『数え方の辞典』 小学館。
 西光義弘 (2004) 「類別詞の認知様式の相関に関する理論的考察」西光義弘・水口志乃扶編著 2004『類別詞の対照』23-38, くろしお出版。
 天野成昭・近藤公久編者/NIT コミュニケーション科学基礎研究所監修 (2003) 『CD-ROM 版日本語の語彙特性』三省堂。
 Lakoff, George. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*, Chicago, IL: The University of Chicago Press.
 Matsumoto, Yo. (1993) Japanese numeral classifiers: a study of semantic categories and lexical organization, *Linguistics*, Vol. 31, 667-713

はまの ひろこ／京都大学大学院 人間・環境学研究所

hamano@hi.h.kyoto-u.ac.jp

さの かおり／お茶の水女子大学大学院 応用日本語論講座

BYG12117@nifty.ne.jp